



Title	『ブリュ物語』未刊行写本(B.L. Cotton Vitellius A. X., ff. 76-83)の略字記号について
Author(s)	高岡, 優喜
Citation	大阪大学言語文化学. 1993, 2, p. 75-84
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/78178
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

『ブリュ物語』未刊行写本(B.L. Cotton Vitellius A.X., ff.76-83)の略字記号について*

高岡 優喜**

Le présent article a pour but d'étudier l'emploi des signes d'abréviation du manuscrit inédit de "Roman de Brut", œuvre dite de Robert Wace au milieu du 12^{ème} siècle. Ayant transcrit 1021 lignes du manuscrit (f.76V v.60 - f.83V v.72), nous en avons recueilli tous les signes d'abréviation et nous les avons classés et étudiés au point de vue graphique. Il en résulte que nous avons compté 14 signes représentant 19 groupes de lettres omises. Ce désaccord s'explique par le fait qu'un seul signe est employé de différentes manières, à moins qu'il ne cause le malentendu. Cependant nous avons également constaté l'emploi de signes différents pour un seul groupe de lettres. Nous avons remarqué la tendance à créer des signes pour des raisons graphiques, et il arrive que les signes tombent sur la partie contractive de deux mots. Les signes fonctionnent de plusieurs façons: 1. sans se combiner avec les lettres alphabétiques; 2. en se combinant avec les lettres alphabétiques limitées; 3. en se combinant de manières différentes avec les lettres limitées aussi bien qu'avec celles qui sont arbitraires; 4. en se combinant librement avec les lettres arbitraires. Le rapport entre les signes et les lettres omises nous a montré un certain nombre de traits graphiques de notre manuscrit.

*Signes d'abréviation du manuscrit inédit Cotton Vitellius A.X. (ff.76-83) (Yuki TAKAOKA)

**言語文化研究科博士後期課程

1 はじめに

Geoffrei de Monmouth のラテン語作品“*Historia Regum Britanniae*”『ブリタニア列王伝』は、12 世紀中葉 Robert Wace によってフランス語韻文に翻案され¹⁾ “*Le Roman de Brut*”『ブリュ物語』と名付けられた。その写本数は断片も含め 24 を数え、現在までに物語全体の刊本が 2 種、アーサー王部分のみの刊本が 1 種類出版されている²⁾。

本稿では、この物語の未刊行写本を 1 種取り上げ、その略語記号についてまとめた。ラテン語写本の略字研究に比べ、古フランス語の略字に関しては確固たる研究がまだ為されておらず、1 写本の用法についてまとめることは意義のある貢献であると思われる。

写本は大英図書館所蔵の Cotton Vitellius A.X., ff.19-114 (以下 C 写本と略す)を用いた。写本は 1 葉の表と裏に 2 段ずつ、1 段あたり 36-39 行書かれており、“*Le Roman de Brut*” は 19 葉から 114 葉までの約 14300 行である。写本の推定年代は 13 世紀末葉とされている³⁾。本研究ノートでは、76 葉 60 行目から 83 葉 72 行目までの 1021 行を研究対象として限定した。言語はアングロノルマンの特徴をそなえている⁴⁾。

2 略語の収集と分類

本稿では、写字生が 76 葉 60 行目から 83 葉 72 行目まで用いた全ての略語記号をテキストから収集、整理分類し、その用法について考察を試みた。筆者が略字記号と見なしたのは、アルファベットとは異なる記号、及びアルファベットでも縮小形で他の文字に上付けされ、何等かの文字群を表しているものである。記号をその形状から整理すると、14 種類であった。

¹⁾Wace 以外にも Gaimar がフランス語に訳してはいるが、現存テキストにはアーサー王部分以降が失われている。Gaimar の作品は BELL, A. (éd.), “An Anglo-Norman ‘Brut’” (Royal 13.A.xxi), Anglo-Norman Text society, Oxford, 1969. に収められている。

²⁾最も古いものが Le Rou de Lincy 版、現在定本となっているのが I.D. O. Arnold 版、そして部分的刊本が Arnold & Pelan 版である。出版年は本稿末尾の参考文献を参照。

³⁾写本の書誌学的側面については、Ward, H.L.D., “Catalogue of Romances in the department of Manuscripts in the British Museum”, London, 1883, 1st vol., pp.259-262. を参照した。

⁴⁾Le Rou de Lincy, “Le Roman de Brut”, 1^{er} tome, pp. lxxiv-lxxx. Arnold, I.D.O., “Le Roman de Brut”, 1^{er} tome, pp. VII-VIII.

(1) ㄅ (2) ㄥ (3) ㄷ (4) ㄴ (5) ㄹ (6) ㅁ (7) ㅂ (8) ㅅ (9) ㅇ (10) ㅈ
 (11) ㅊ (12) ㅋ (13) ㆁ (14) ㆁ

更にこれらの記号を機能別に以下の様に4種類に大別した。

1. 記号が文字と結合せず、単独で機能するもの
2. 特定の文字と結合して機能するもの
3. 特定及び不特定双方の文字に別質の結合を見せるもの
4. 不特定の文字と結合し、共通の影響を与えるもの

ではこの分類に従って、14の記号を各々検討することにする。以下、事例は略された文字群に支障の無い限り基本形でまとめ、複数ある時にはその数を付記した。尚、記号を説明する際、記号の形状分類時に用いた通し番号(1)~(14)をそのまま使用している。1つの記号に複数の別質の機能がある場合には、番号にダッシュ(ex. (4)')をつけて表した。

2.1 他の文字と結合せず単独で機能する記号

(1) ㄅ = com / con

略字記号14種類中これが唯一の、他の文字と結合せず単独で機能する記号であった。com が12例、con が51例、計63例となった。筆者がこの略語を com/con の2種類に解釈したのは、綴りの完全形においてこの文字群が唇子音に先行する場合、com となる傾向が見受けられたからである。完全形で、-mb- が24例、-mp- が12例(ex.80R b 66 ambes、80V d 50 champaigns)であるのに対し、-nb-は4例、-np-も5例(ex.77R a 5 sumumst、82R b 65 enpeinst)と少数であった。

< com の例 > *combatre* 5, *commune* 2, *compaignes* 2, *compaignie* 2, *compaignun*.

< con の例 > *aconter*, *conceveir* 2, *condute*, *conforz*, *congé*, *conquere* 4, *conree* 2, *conseil* 9, *conseiller* 6, *conte*, *conter* 2, *contenance*, *contenir* 2, *contre* 5, *contree* 4, *contretenir*, *escondist*, *encontre*.

2.2 特定の文字と結合して機能する記号

(2) $\underline{p}$ = par / per

この記号は $\underline{p}$ のみと結合し、par/per の2種の文字群を略したと思われる。par と判断できるものが51例、per が9例、合計60例である。写本中の完全形の綴りが例外なく par/per の2種に分かれていたため双方の可能性を残した⁵⁾。

< par の例 > *par*⁶⁾ 22, *parduner*, *parfin*, *parfunz*, *parler* 2, *parmi*, *parole* 2, *parsiwant*, *part* 6, *partir*⁷⁾ 7, *apareiller* 3, *departir* 4.

< per の例 > *perdre* 5, *peres*, *perri*, *aperceveir* 2.

(3) $\underline{p}$ = pru / pre

この記号も $\underline{p}$ のみと結合する。*prudumes*, *pruesce*, *pres* 2 の4例であった。*prudumes*, *pruesce* に関しては、写本中に完全形で、*pruz* が2例出ており、*pro* にしている例もないことから、*pru* と判断した。*pres* は「近くに」の意味の語であり、*pre* と読んだ。従ってこの *pre* に関しては、(13)の記号の機能と重複することになる。

(4) ml^{u} t = mult

(4') 1^{u} = -ler

この記号は 1 のみと結合し、写真版からの読み取りに誤りがなければ、2つの全く異なった文字を表している。計45例。

⁵⁾ しかし完全形で明確に区別されているだけに、1つの記号をこの2種の綴りに使用した写字生の意図は理解しきれない。写字生にとっては *par* と *per* は混乱を生じない、確実に識別可能な文字群なのだろうか。もしくは、一種の混乱が生じていたのだろうか。*par* と読める単語の中には、*a* の部分がラテン語の *a* に由来するものもあれば(ex. *parole* < *parabola*)、*e* に由来するもの(ex. *par* < *per*)もある。同様に *per* と読める単語の *e* の部分も、ラテン語の *a* に由来するもの(ex. *père* < *pater* の対格形 *patrem*)、*e* に由来するもの(ex. *perdre* < *perdere*)の双方がある。故に、あくまで推測の域を出ないが、もしも写字生において語源の知識が不明確であったなら、*par* と *per* は彼にとっては現用での区別はあるものの、本質的には同価値のものと考えられていたのかもしれない。

⁶⁾ 79Vd 57の原文は *Ki par surent meint language*; となっており、3既刊本から判断するに、*parler* の間違いではないかと思われる。

⁷⁾ 81Ra 25の原文は *Ne sembla parti cuart ne fol* となっており、この *parti* は意味をなさず、*pas* の間違いではないかと思われる。

< mlt 自体との結合 : (4) ml^ut = mult >

mult はこの記号と不可分に結び付いており、完全形で書かれた例は 1 つも無い。この場合、記号は l と結合するというよりは mlt そのものに結びついている。そしてこの記号を u と読ませるのは mult の場合のみであり、(4)' との解釈の混同はない。40 例。

< 他の l との結合 : (4)' l^u = -ler >

-ler は、(14) と共通するため再度言及することになるが、(4) は全て語尾の er を表している。er 部分の語源については、aler は -are、chevaler は -arius に由来する。5 例 : aler, chevaler 4.

2.3 特定及び不特定の文字と結合する記号

ここでは一方で特定の文字と結合しながら、他方では不特定の文字とも全く別質の結合をする記号を取り扱う。以下、* は不特定の文字をさす。

(5) qⁱ = qui (5)' *ⁱ = * ri

この記号は、q との結合時と他の不特定の文字との結合時ではその機能に大きな差異がある。q の場合は qui となり、他の文字の場合はその文字に ri を付加することになる。計 21 例。

< q との結合 : (5) qⁱ = qui >

4 例みられた。興味深いのは、今回の研究対象とした箇所では、関係詞や疑問詞の qui にはこの記号は用いられず、ki なる綴りで書かれていることである。この記号の表す qui は単語の一部、もしくは連結形で、丁度 2 語にまたがる部分に用いられている。また、この記号の表す綴りはさまざまで、venqui, vesqui の場合は、開音節であるが、qu'il は閉音節であり、quidez は u を読む。quidez, venqui, vesqui, qu'il

< 不特定の文字との結合 : (5)' *ⁱ = * ri >

17 例あり、一様に ri と解釈した。使用頻度としては p との結合が最も高く 11 例 : *entrepris*, *princes*, *pris* 2, *pristrent*, *prisuns*, *privee* 3, *privement* 2. t との結合が 3 例 : *revertriver*, *mestrie*, *peitrine*. g との結合が 2 例 : *Colgrin* 2、c との結合が 1 例であった : *s'escrie*.

(6) $q^{\omega} = qua$ (6)' $*^{\omega} = * ra$

(7) $q^{\alpha} = qua$ (7)' $*^{\alpha} = * ra$

この2つの記号は各々2通りの同じ機能を有しているため、まとめて論ずることとする。 q と結合した時は双方とも qua を表し、不特定の文字と結合した時も双方等しく $* ra$ を表した。重要なのは q と結合するか他の文字と結合するかということであり、2種の記号の形状の差異は問題ではなかった。 q との結合が29例、不特定の文字との結合が29例、合計58例である。

< q との結合 : (6) $q^{\omega} = qua$, (7) $q^{\alpha} = qua$ >

q と結合した場合は一様に qua となり、他方の読みとの混同はない。*quant* 28, *quanqu'il*

< 不特定の文字との結合 : (6)' $*^{\omega} = * ra$, (7)' $*^{\alpha} = * ra$ >

使用頻度は g との結合が最も高く、それも同単語で(*grant*)26例、 t との結合が2例(*traïson*, *travers*)、 p との結合が1例(*pramist*)である。

(8) $q^{\bar{}} = que$ (8)' $*^{\bar{}} = * n / * m / * en$

(9) $q^{\mathfrak{z}} = que/qu$

(10) $*^{\cup} = * n / * m / * en$

本来なら(9)は q のみと結合するため3.2の項目で、(10)は不特定の文字に結合するため3.4の項目において扱うべきであるが、3つの記号の影響範囲が重なりあっているため、まとめて論ずることにする。

<(8)(9)の機能の重複>

この2つの記号は q に結合して que もしくは qu ((9)のみ)を表す。この qu は後続の母音との連結形 *quanqu'il* を指す。この形は(5)が q と結合した際にも現れており(*qu'il* 77Vc 9)、同一の文字を略語部分を変えて表している。また、接続詞や関係代名詞の que は全て(8)と結合し、単語中の que は(9)と結合している。総数13中(8)が que のみ9例、(9)が que の場合(*evesque* 2, *qanque*)が3例、 qu の場合(*quanqu'il*) が1例の4例である。

<(8)' (10)の機能の重複>

(8)'は q に結合すると一様に *que* となるが、それ以外の文字につくと、母音の後に n/m を、母音が無い場合は en を補うのである。この機能は(10) も同じで、記号の形状の差異とは無関係に等しく機能している。記号の位置についてはあいまいな面があり、正確に母音の上に置かれてはならず、2 例を除いて全て後続の子音の上あたりに置かれていた。先行する母音の種類は a, u, o の 3 種類、加えて母音 e を補った en があった。尚、(1)の記号が表していた com の綴りが、ここでは co の o の上に(8)の記号を置くことで表現されており、機能が重複している。総数は 10 例で(8)が 6 例：[a+m] *champ*. [u+n] *dunc*. [o+n] *entreconbatre*. [+en] *dunent*, *vilament*, *feimenties*. (10)が 4 例である：[u+n] *serrit unt*. [+en] *mururent*, *ireient*, *enbuchement*.

2.4 不特定の文字と結合する記号

(11) * ^u = * us

この記号はラテン語の長い o に由来する u を持つ us と、同じく長い u に由来する u を表す us、短い u に由来する u の 3 種に用いられている。合計 41 例である。尚、人名は別扱いとした。

- a) 長い o に由来する u 33 例：*nus* 16, *vus* 17. 人称代名詞の *nus* や *vus* として多く用いられている。*nus* はこの写本の研究対象部分では 25 例あるが、そのうち完全形は僅か 9 例で、*vus* に関しては全て略語で書かれており、完全形は無い。ここでの *nus* は人称代名詞のみで、*nul* の主格形ではない。
- b) 長い u に由来する u 6 例：*dessus*, *jus* 2, *plus*, *dejuste*, *juste*.
- c) 短い u に由来する u 1 例：*lius*.
- d) 人名主格形の *us* に由来する u 1 例：*Gillomar^us*.

(12) * ^u = * ur

この記号は *francian* なら *or* と綴るべき略語であるが、アングロノルマンであるため、*ur* をあてた。アーサー王の名 *Ertur* については、略語を用いたのはこの

1 例のみである。計 19 例: *amur*, *demurier*, *deit purveusement*, *entur*, *esturmir*, *murrir* 2, *pur* 7, *purtrait* 2, *segnurs*, *sucurs*, *Ertur*.

(13) *^e = * re

この記号は一様に re を表していると思われる。計 9 例。

a) e を含む音節にアクセントのある場合 2 例: *destreinst*, *grelle*.

b) e を含む音節にアクセントのない場合 7 例: *regreta* 2, *guerreout*, *otreout*, *creüz*, *grevé*, *suentre* 2 の合計 9 例であった。*suentre* については(14)の機能と一部重複する。

(14) *^r = * er

この記号は er を略しているように思われる。計 55 例あり、e の語源により 12 種に分類した。

a) 短い a に由来する e 2 例: *mer* 2

b) 短い e に由来する e 8 例: *adverse*, *entercé*, *merci* 4, *terme*, *terre*.

c) 短い i に由来する e 4 例: *cereles*⁸⁾, *nerci*, *vertu* 2.

d) 長い a に由来する e 7 例: *guarder*⁹⁾, *mander* 4, *porter*, *returner*. (4)の項目で扱った *aller* (< *amblare*)も同種の er であるが、この略字を用いてはいない。

e) 長い e に由来する e 1 例: *aver*.

f) 長い i に由来する e 6 例: *merveiller* 6.

g) ラテン語の接尾辞 -arius に由来する e 1 例: *leger* (4)の項目で扱った *chevaler* (< *caballarius*)も同種の er であるが、この略字を用いてはいない。

h) フランク語に由来する e 2 例: *halberc*, *herberge*.

⁸ 写字生の間違いで、*cercles* ではないかと思われる。

⁹ 5 世紀ゲルマン語の *wardon* がラテン語的語尾 **guardare* をとり、それが *guarder* となる。E.Bourciez, “Précis de Phonétique française”, p.224-225.

- i) フランス北部方言において、f+r, v+r, t+r, d+r の子音群が敬遠されたことにより、渡り母音が発生した¹⁰⁾と思われる例 12: [d+er] *atendere*, *avendereient*, *dereit*, *gendere* 2, *pendere*, *prenderaï*, *sumundere*, *tendereient*, *vinderent*, *volderent*. [t+er] *oscisterent*. (13)の *suentre* も同様に渡り母音が発生して然るべきケースであるが、この部類には含まれていない。
- j) -er 動詞の活用形が 3 例: *muntera*, *mandereit*, *surundera*.
- k) 人名、地名が 4 例: *Merlin*, *Badere*¹¹⁾ 2, *Sumersette*.
- l) re のメタテーズとも思われるが、以下の語の完全形でメタテーズをおこしている例が 1021 行内には無いため、re そのものと解釈すべき可能性もある er 5 例: *aspersce*, *enpers*, *peries*(=proies), *sempers* 2.

3 まとめ

本研究ノートでは、C 写本から転写した 1021 行の略語記号についてまとめを試みた。略語とその機能は 1 対 1 で対応しておらず、1 つの略語に複数の別質の機能が見られたり、複数の記号が重複して同一の機能を有する場合もあった。また、1 つの機能においてもその表す綴りは統一されておらず、例えば *com/con*, *par/per*, *pru/pre*, *a/e/o/u*/+唇音、等々各綴りには複数の可能性があった。その半面綴りが同一ならば開音節であろうと閉音節の一部であろうと問題にされなかったり (ex. *parole*, *parler*)、略字部分が 2 語にまたがる場合 (ex. *qu'il*) もあり、写字生の意図を図りかねるようなケースもあった。今後転写を進め C 写本の他の部分の略語の用法を検討し、別作品の写本の略語の用法との差異、共通項を見いだしてゆきたいと思う。

参考文献

- Arnold, I.D.O. et M.Pelan (éd.), “La Partie Arthurienne du Roman de Brut”, Klincksieck, Paris, 1962.

¹⁰ M. K. ポウプ著『アングロノルマン語』p.47.

¹¹ この *Badere* は完全形でも *Badere* であるが、既刊本は 3 種とも *Bade* となっており、C 写本の綴りは著しく異なる。

Arnold, I.D.O.(éd.), “Le Roman de Brut”, 2 vols., SATF, Didot, Paris, 1938-1940.

Le Rou de Lincy (éd.), “Le Roman de Brut”, 2 vols., Edouard Frère, Rouen, 1836.

Bourciez, E., “Précis de Phonétique française”, Klincksieck, Paris, 1950.

Pope, M.K., “From Latin to Modern French with especial consideration of Anglo-Norman Phonology & Morphology”, Butler & Tanner, Lndon, 1952. (M. K. ポープ著『アングロノルマン語』大高順雄・福井秀加訳述)

Chassant, L.-A., “Dictionnaire des abréviations latines et françaises”, Georg Olms Verlag Hildesheim, New York, 1970.